

スポーツ指導経験が大学生の社会的スキルの 向上に及ぼす効果に関する研究

——大学運動部活動がもたらす非認知スキルの関与について——

松田 亮*・田村 孝洋**

1. はじめに

運動部活動は、学校教育の一環として、自主的、自発的なスポーツの参加により、高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びをもたらすことを意義としている（文部省、1998）。一方で、大学での運動部活動は、スポーツの高度化を担うエリートスポーツ選手の養成におけるスポーツシステムの重要な位置づけであることや、大学4年間でその競技能力をさらに高めさせ、企業スポーツやプロスポーツへと送り出す役割を果たしてきた（大野ほか、2015）。そのため、大学における運動部活動は、競技スポーツの特性に偏っている傾向にあると感じられる。

まず、我が国における運動部活動の始まりは、今から約150年以上前に遡る1870年代以降の明治時代とされ、そこでは運動部活動はエリート精神を涵養するための手段として用いられており、最初から組織的な活動をおこなっていたわけではなく、今日までにつづく運動部活動の組織が築き上げられたのは、戦後における学校教育改革が要因とされている（竹之下ほか、1983；菊，2009）。そして、現在までに、文部科学省といった行政をはじめ、運動部活動の在り方に関する調査研究は様々な視点から理解を深め（桂ほか，1990；上野ほか，1998；阿江，2000），近年においては急速に加速している。

その背景としては、2012年12月に大阪市立高校の運動部指導教員による体罰が原因で、運動部員が自ら命を絶つという事案が発覚した。これを契機に、体罰・暴力に関する調査が進められ、運動部活動の在り方について是非が問われている。このことについては、「武士道－軍隊－学校運動部」といった図式の中で、戦前・戦時中における軍国主義化が招いた勝利至上主義が背景にあり（川辺，1980），この勝利至上主義こそが日本のスポーツにおける構造上の問題であると指摘している（内海，1998）。このように運動部活動に対しては、負の側面が大きく挙げられていることを目にする。

しかし、学習指導要領にも示してあるように、生きる力の育成、明るく豊かな生活を実現させる役割こそが運動部活動が目指す教育であることや、大学における運動部活動に関しては、学生を次なる段階の社会人へと育成しないとイケないことから、運動やスポーツを通して社会的スキルを獲得させることが重要である。大学卒業後にスポーツクラブを起業、運営し、自らスポーツ環境を創り出すことにつながるような自治団体活動へと導くことが本来の大学運動部活動の教育的価値の一つであると言える（内海，1989，1998）。

続いて、社会的スキルとは、他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能と定義され（相川，2000），もっとも中心となるのは、対人コミュニケーション能力であろう。近年では、大学体育授業におけるコ

* 広島経済大学経済学部助教

** 中村学園大学教育学部助教

コミュニケーションスキルや(杉山, 2008), ライフスキルの獲得(Holt et al, 2009), リーダーシップなど(清水ほか, 2010), 様々な社会的スキルを獲得させるためのプログラムを実践し, 多くの研究が進められている。なお, 大学体育授業での宿泊を伴ったキャンプ実習などの研究については, 実習体験が望ましい人間関係を築き, 友人関係における親密性の促進に有効であるなど, 社会人基礎力の向上を明らかにしていることや(西田ほか, 2002; 青木ほか, 2012; 中澤ほか, 2014), 身体活動量の増加に伴う社会的スキルの向上効果などについても報告がされている(橋本, 2012)。

以上の先行研究からも, 社会的スキルを獲得させるために, 大学体育授業では多くの試みがされていることがわかる。しかしながら, 大学運動部活動についての研究は, 競技パフォーマンスを向上させるために, 医・科学的トレーニングを扱ったものや技術的側面に着目したもののばかりである。コーチングに関連したスポーツ指導の研究についてもおこなわれているが, 運動有能感を検証するに留まっている(桂, 1990)。このことから, 大学運動部活動は競技スポーツ中心で活動していることが伺えるが, パフォーマンスを向上させるためには, 自らの身体を熟知し, 自らが専門としている競技特性についても知っておかなければならない。前述したように, 社会的スキルを獲得させることも大学運動部活動の使命であると考えられる。

そこで本研究は, 運動部活動を継続している大学生を対象に, 実際に指導現場で携わることで, スポーツ指導の経験が主張性, 感受性, 対

人関係スキルといった社会的スキルにどのように影響するのか検証することを目的とした。また, 現代社会で求められている非認知スキルにおける, 個人の性格特性の関与についても探ることとする。

2. 研究方法

2.1 対象者

大学の陸上競技部に在籍している男子学生7名, 女子学生3名の計10名を対象とした。なお, 指導に携わった大学生についてはJAAF公認ジュニアコーチ養成講習会, JAAFアスリート発掘育成プロジェクトU-13クリニックへの参加などを通して指導者としての力量の確保に努めた。

2.2 実施概要および実施期間

実際の指導現場としては, 小学校の体育や総合的な学習の時間としておこなった出前講座で, 陸上競技を児童に指導した。実施期間として2015年8月から12月, 2016年9月から11月とし, 2年間で合計延べ18会場, 延べ2,533人の児童の参加を得た(表1)。

指導内容としては, 日本陸上競技連盟のテキストなどを参考に(日本陸上競技連盟, 2010), 設定された授業時間での45分あるいは90分の中で, 事前に小学校から希望されていた特定の運動をおこなう場合と, 設定された時間内で複数の運動をローテーションでおこなった。その際, 学年などを考慮して適当と思われる内容を選択した(表2)。

表1 実施会場数および参加児童数

	会場数	参加児童数(人)
2015年度	10	1,762
2016年度	8	771
合計	18	2,533

表2 スポーツ指導で取り上げた運動例

ウォーミングアップの運動		
	<ul style="list-style-type: none"> ・体操, ストレッチング ・真似っこジョギング ・鬼遊び (手つなぎ鬼, 氷鬼, ネコとネズミ) ・集配リレー 	
短距離走につながる運動		
	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢づくり ・ミニハードルランニング ・助走付き全速疾走 ・変形スタートダッシュ 	<ul style="list-style-type: none"> ・スプリントドリル ・スキップ ・スタートの構え方とスタートダッシュ ・リレー
跳躍運動につながる運動		
	<ul style="list-style-type: none"> ・川幅跳び ・リズム幅跳び ・立ち幅跳び 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム跳躍 ・輪踏み幅跳び ・10~15m 助走距離で跳躍
投運動につながる運動 (※ジャベリックボールを使用)		
	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい持ち方の指導 ・反りと腕だけでの投げ ・助走付きサイドステップスロー 	<ul style="list-style-type: none"> ・腕だけでの投げ ・スタンディングスロー ・助走付きクロスステップスロー
ハードル走につながる運動		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ラダーやミニハードルを使用したリズム走 ・ハードルドリル (リード脚, 抜き脚) ・低ハードル練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴムバー・ハードル走

2.3 調査内容

本研究における社会的スキルを調査するにあたり、相川・藤田 (2005) によって作成された成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いた (表3)。これは、社会的スキルをコミュニケーションスキルと対人スキルの2つの側面から同時に測定できる尺度であり、「関係開始 (8項目)」、「解説 (8項目)」、「主張性 (7項目)」、「感情抑制 (4項目)」、「関係維持 (4項目)」、「記号化 (4項目)」の計6因子35項目で構成されている。なお、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いた経緯として、大学生における社会的適応といった数多くの研究でも測定尺度として取り扱われており (須田, 2011)、本研究でも有用であると考え採用した。

また、質問紙による調査として、スポーツ指導の事前 (2015年8月, 2016年9月) と事後

(2015年12月, 2016年11月) におこない、各項目の回答方法は、「かなりあてはまる (5点)」、「ややあてはまる (4点)」、「どちらでもない (3点)」、「あまりあてはまらない (2点)」、「ほとんどあてはまらない (1点)」の5件法とした。

2.4 統計処理

社会的スキルの向上効果を明らかにするため、各因子を構成する項目を得点化し、各測定段階で因子ごとに得点の平均および標準偏差を算出した。そして、平均値の差についてはウィルコクソンの符号付順位検定を用いて分析をおこなった。また、スポーツ指導事後によるアンケート調査の結果から、社会人スキルの因子間の関連を検討するために、各因子の間においては、スピアマンの順位相関係数を用いて算出し

表3 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度

項目	
関係開始 (8項目)	1) 相手とすぐに、うちとけられる
	6) 誰とでもすぐ仲良くなれる
	10) 知らない人でも、すぐに会話を始められる
	14) 人と話すのが得意である
	19) 他人が話しているところに、気軽に参加できる
	23) 誰にでも気軽にあいさつできる
	27) 知り合いになりたいと思っても、話のきっかけを見いだすのがむずかしい
	31) 初対面の人に、自己紹介が上手にできる
解読 (8項目)	2) 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる
	7) 顔つきから相手の感情を読みとれる
	11) 話をしているとき、相手の表情のわずかな変化も感じとれる
	15) 自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく
	20) 嘘をつかれても、たいてい見破ることができる
	24) 相手の目を見て、自分が何か不適切なことを言ってしまったことに気がつく
	28) 初対面でも、少し話をすれば相手がどんな人かだいたいわかる
	32) 自分に関心を持っている人は、すぐに見分けられる
主張性 (7項目)	3) 自分が不愉快な想いをさせられたときには、はっきりと苦情を言う
	8) 友だちが自分の気持ちを傷つけたら、そのことをはっきりと伝える
	12) どんなに親しい人に頼まれても、やりたくないことははっきりと断る
	16) 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている
	21) どちらかといえば、自分の意見を気軽に言うほどだ
	25) たとえ人から非難されたとしても、うまく片付けることができる
	29) 相手と意見が異なることをさりげなく示すことができる
感情統制 (4項目)	4) 気持ちをおさえようとしても、それが顔に現れてしまう
	13) 困ったときは顔にでやすい
	17) 感情をあまり面(おもて)にあらわさないでいられる
	30) 自分の感情をコントロールするのが苦手である
関係維持 (4項目)	5) 相手の立場を考えて行動する
	18) その場にあった行動がとれる
	26) 相手の話をまじめな態度で聞くことができる
	34) まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できる
記号化 (4項目)	9) 表情が豊かである
	22) 身振り手振りをまじえて話すのが得意である
	33) 相手に良い感じを持ったら、それをすなおに表現できる
	35) 感情を素直にあらわせる

た。なお、有意水準は5%未満とし、統計処理ソフトにはSPSS22.0を用いた。

3. 結 果

表4はスポーツ指導の事前および事後で、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いたアンケート調査を実施し、得点化したものを、6

つの因子ごとに平均値を示したものである。まず第1の因子である「関係開始」では、事前の平均値が 2.89 ± 0.99 であったのと比較して、事後は 3.36 ± 0.75 と有意な値を示し($p < .05$)、第2の因子である「解読」でも事前の平均値が 2.89 ± 0.60 であったのと比較して、事後は 3.46 ± 0.71 と有意に高い値を示した($p < .01$)。

しかし、第3の因子である「主張性」では、事前の平均値が 2.56 ± 1.11 であったのと比較して、事後は 2.94 ± 0.84 と得点は向上したものの、有意な値は示さなかった。続いて、第4の因子である「感情統制」については、事前の平均値が 3.20 ± 1.07 であったのと比較して、事後は 2.88 ± 1.09 と有意に低い値を示した ($p < .05$)。そして、第5の因子である「関係維持」では、事前の平均値が 2.63 ± 0.93 であったのと比較して、事後は 3.78 ± 0.73 と有意に高い値を示し ($p < .01$)、第6の因子である「記号化」でも、事前の平均値が 2.55 ± 1.04 であったのと比較して、事後は 2.98 ± 0.83 と有意な値を示した ($p < .05$)。

表5はスポーツ指導事後によるアンケート調査の結果から、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いて因子間の関連を示したものである。まず、「関係開始」との間では、「主張性」 ($r = .66$)、「感情統制」 ($r = .72$)、「関係維持」 ($r = .65$)、「記号化」 ($r = .74$) で高い相関を示

したが ($p < .05$)、「解説」 ($r = .59$) については高い相関を示さなかった。次に、「解説」との間では、「主張性」 ($r = .86$) でかなり高い相関を示し ($p < .01$)、「関係維持」 ($r = .72$)、「記号化」 ($r = .65$)、で高い相関を示したが ($p < .05$)、「感情統制」においては低い相関を示した。続いて、「主張性」との間では、「関係維持」 ($r = .71$)、「記号化」 ($r = .78$) で高い相関を示したが ($p < .05$)、「感情統制」においては高い相関を示さなかった。そして、「感情統制」との間では、「記号化」 ($r = .72$) で高い相関を示したが ($p < .05$)、「関係維持」においては低い相関を示した。また、「関係維持」と「記号化」との間ではかなり高い相関を示した ($r = .84$, $p < .01$)。

4. 考 察

本研究では、陸上競技部に所属している大学生を対象に、スポーツ指導を経験することで、大学生の社会的スキルにどのように影響するの

表4 社会的スキル得点化によるスポーツ指導前後の変化

	事前		事後		P
	M	SD	M	SD	
関係開始	2.89	0.99	3.36	0.75	*
解説	2.89	0.60	3.46	0.71	**
主張性	2.56	1.11	2.94	0.84	
感情統制	3.20	1.07	2.88	1.09	*
関係維持	2.63	0.93	3.78	0.73	**
記号化	2.55	1.04	2.98	0.83	*

* $p < .05$ ** $p < .01$

表5 社会的スキルにおける相関 (スポーツ指導事後)

	1	2	3	4	5	6
1) 関係開始	1.00	.59	.66*	.72*	.65*	.74*
2) 解説		1.00	.86**	.48	.72*	.65*
3) 主張性			1.00	.50	.71*	.78*
4) 感情統制				1.00	.42	.72*
5) 関係維持					1.00	.84**
6) 記号化						1.00

* $p < .05$ ** $p < .01$

かを検証した。そして、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いて、全35項目から成る6つの因子を得点化し、それらの平均値をスポーツ指導の事前から事後にかけて比較した結果、有意な向上を見せた因子は、「関係開始」、「解読」、「関係維持」、「記号化」となっており、有意な低下を見せた因子は、「感情統制」であった。また、「主張性」に関しては有意な差は認められなかった（図1）。まずは、それぞれの因子における社会的スキルの変化について検証を述べていく。

4.1 社会的スキルにおける変化の検証について

最初に、本研究において有意な向上を示した、「関係開始」、「解読」、「関係維持」、「記号化」について検証していくこととする。「関係開始」とは対人関係の形成から成るものであり、初対面の相手に対して、出会ったときに、どのように対応していくのが必要とされるスキルが含まれる。また、同じく対人関係の維持から成る、「関係維持」は相手の立場を考えて行動することなどが含まれ、どちらの因子もスポーツ指導

後に有意な変化を示した（表4、図1）。このことについては、体育・スポーツ活動への参加や（石倉、2000）、キャンプ実習やスキー実習といった、実習体験が望ましい対人関係の醸成や促進に有効であると指摘していることから（西田ほか、2002；中澤ほか、2014）、本研究でおこなったスポーツ現場での指導体験においても、初対面の相手ともコミュニケーションをとる体験が増えることで、対人関係を構築できる可能性が推察され、表5に示してあるとおり相関が高いことから、「関係開始」、「関係維持」といった因子による社会的スキルが有意に向上したと考えられる。

次に、有意な変化を示した（表4、図1）、「解読」については、表情やしぐさから相手の意図や感情を正確に読み取るスキルとして表され、「解読」と強い相関のある「記号化」については（大坊ほか、2010）、自分の意図や感情を正確に伝えるスキルであり、コミュニケーション行動の基本となる言語・非言語的な能力としての基本スキルとして位置付けられている（藤本ほか、2007）。そして、解読力が高い人や、スポーツ場面において自分の考えや気持ちを相

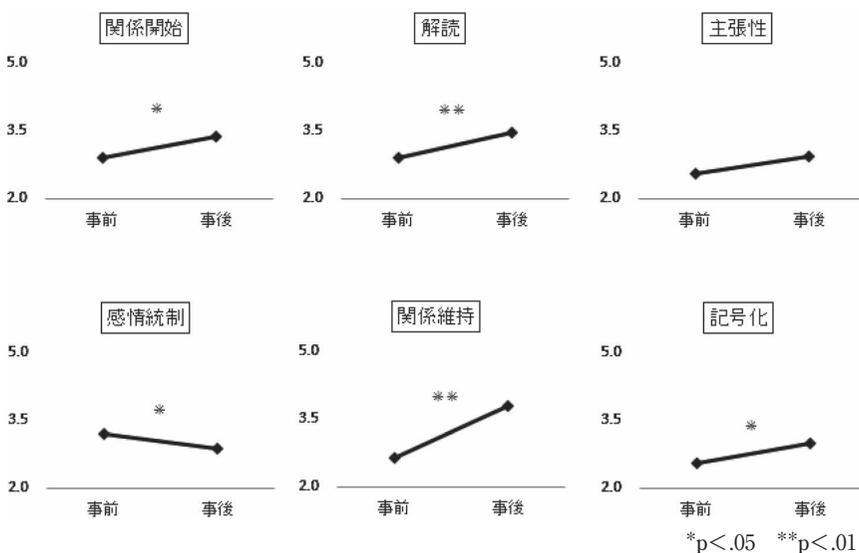


図1 社会的スキルの変化

手に伝えることが上手な人は、日常場面でより多くの向社会的行動をおこなっていることや(杉山, 2004), 向社会的行動を多くおこなうことで、他者に好まれることを促進されると指摘している(Caprara et al, 2000)。本研究でのスポーツ指導の対象者が、児童であり、前述にも示してあるように「関係開始」, 「関係維持」といった因子が向上していることから、児童とのコミュニケーションは図れていたと判断すると、感情を読み取ることや、相手に伝えるという場面では容易であったと感じられたため、「解説」および「記号化」の因子向上に結びついたものと考えられる。なお、「解説」, 「記号化」に含まれる非言語のコミュニケーションには相手の行動から意志を判断するのに重要であると示してあることから(小杉, 2002), スポーツ指導における非言語コミュニケーションによる身体的活動や運動学習の重要性を示唆するものでもある。

続いて、有意に低い値を示した(表4, 図1), 「感情統制」については、自分の感情をコントロールするスキルであり、コミュニケーションを円滑におこなうために自らを抑え周りに合わせるものとして定義されている(藤本ほか, 2007)。つまり、「感情統制」を構成している4項目を見れば分かるが(表3), この因子で平均得点が低くなったことで、自らの感情をコントロールすることが出来るようになったことが示される。しかしながら、「感情統制」は性格特性に関わることや(須田, 2011), 本研究においては、スポーツ指導の対象者が児童であったことから、スポーツ指導に携わることで、自らの感情をコントロールすることが出来るとは言い難い。したがって、指導者の性格特性や対象年齢の側面から検討する事が必要であると考えられる。

一方で、本研究において唯一、有意な差が認められなかった「主張性」については、自分の

意志や考えを相手に伝えるというスキルであり、自分を押し通すといった、自己主張タイプの項目が多いことから(表3), 敵対性を低くするために、単なる自己主張ではなく共感的な自己主張が必要であると指摘している(Woolfolk et al, 2000)。また、児童を対象とした、体育授業において自尊感情の形成に寄与する要因としては、運動有能感をもたせることが重要であると報告されている(賀川ほか, 2003)。本研究では、運動有能感を測定するには至らなかったが、スポーツ指導をおこなう上で、児童たちが自らチャレンジする環境や、運動を楽しんでもらえるような内発的動機づけを高めるプログラムを用意し、一方的な指示をするのではなく、児童と共に指導者が一緒に楽しんで活動をおこなうことにより、自己主張が抑えられたのではないかと推察される。したがって、本研究における「主張性」において、有意な値を示さなかったものと考えられる。

このことから、運動経験が社会的スキルに般化するかどうかなの問題に対して、単にスポーツをしているだけでは社会性が身につくわけではないと指摘していることから(杉山, 2008), スポーツ現場における指導体験の重要性が示唆される。

4.2 非認知スキルの関与について

将来において、豊かで幸せな生活や充実した職業人生を送るためには、賃金や雇用形態といったものに関して、高い水準であることを望むであろう。そのため、職業人生における成果をあげるためには、教育の効果が必要とされており、就業前の学歴や人的資本の形成について、知識や計算による達成度を評価する認知スキルを高めることが重要視されていたが(Heckman et al, 1987), 21世紀に入り、グローバル化や知識基盤社会化と叫ばれる時代となったことで、社会が大きく変化するとともに、社会的スキル

が求められるようになった。そして、認知スキルとは異なる、意欲や忍耐力などといった人間の気質や性格的特徴を含む、非認知スキルが注目されている (Heckman et al, 2006, 2013; Lee et al, 2014)。しかし、教育によって涵養された非認知スキルは認知スキルより、子どもの長期的な成長の成果に影響を与えるといった報告があるが (Heckman et al, 2010), 認知スキルのように数値化することが困難なため、非認知スキルとして、どの因子に変化が起こったかどうかは正確には分からないことが現状であり、研究が進められている段階である。

そこで、本研究で用いた成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の結果から、表6に示してある非認知スキルとの関与を探ることとする。まず、「関係開始」と「関係維持」は対人関係による形成や維持が問われ、初対面で生じる印象が親密な関係を築くための重要な要因であると示唆していることや (小川, 2000), 本研究においても相関が高かったことから (表5), 社会的スキルの主要な構成要素として、他者との良好な関係を構築させることを意味する、社会的適正に結びつくのではないかと考えられる。次に、「解釈」と「記号化」については、相手の意図や感情を読み取ることや伝えるといったスキルとなり、メタ認知とは、自分の現状を把握し、理解およびコントロールする能力と定義されていることから (Schraw et al, 1994),

相互の関係性として、相関が強いと感じられる。続いて、「感情統制」は自らの感情をコントロールするといった自律性や精神的安定が関わり、忍耐力との関連を指摘していることから (高井, 2007), 非認知スキルとの関与が強いものだと推察される。なお、「主張性」については、対人関係において、いかに適切に自己を主張することができるかが問われ (玉瀬, 2005), 自らに対して自信がないと相手にも主張することが困難と感じるため、自己認識と結びつくのではないかと考えられるが、自己主張が強いことや親密な人間関係を構築できていない場合は、非認知スキルとの関与は低いものと推察され、性格的特性も視野に入れておく必要がある。

また、スポーツ活動は、子どもの自己認識や競争心および忍耐力や責任感といった非認知スキルを高めるものだと報告があることから (Cornelißen et al, 2010), 本研究で用いた成人用ソーシャルスキル自己評定尺度による社会的スキルと非認知スキルとの関与が高まれば、スポーツ指導を体験することで、自らの能力を高め、社会に貢献できる人材育成の手段として期待ができる。

4.3 大学運動部活動の在り方について

学校教育において、将来社会人として長く、体育・スポーツに親しみ、心身の健全な発達と明るく豊かな生活を実現させるために、多くの

表6 非認知スキルの種類

種類	意味
自己認識 (Self-perceptions)	自己の能力・遂行力への自信・信頼
意欲 (Motivation)	行動につながる動因・誘因
忍耐力 (Perseverance)	粘り強い、根気がある
自制心 (Self-control)	行動をがまんして長期利益を優先させる
メタ認知 (Meta-cognition)	自分の思考や行動を客観視する
社会的適正 (Social competencies)	他者との良好な社会的関係を構築できる
回復力と対処能力 (Resilience and coping)	すぐに立ち直る、うまく対応する
創造性 (Creativity)	新規で有用なアイデアを作り出す

中室 (2015) より引用

児童や生徒および学生が、発達段階に応じて充実した、体育・スポーツ活動を実践してきた(文部省, 1972)。また、運動部活動に関しては、参加している生徒と、全く運動部活動に参加していない生徒を比較した場合、その後の人間形成や(鈴木ほか, 1988)、ライフスキルの向上に影響を及ぼすなどといった(上野ほか, 1998)、ある一定の成果をあげているものの、近年では、目先の結果だけを求めた、勝利至上主義が先行し、体罰・暴力にも向けられている。

そして、大学における運動部活動での競技スポーツ特性に懸念を感じたことから、本研究では、運動部活動に所属している学生を対象に、単に競技を継続するための部活動ではなく、将来において、充実した職業人生を送ることや魅力ある人材を育成させたいことから、スポーツ現場での指導体験をおこなうことで、どのような社会的スキルが身につくのかを調査した。その結果、社会的スキルにおける「関係開始」、「解説」、「関係維持」、「記号化」、「感情統制」の5つの因子で有意な差が認められたため、スポーツ指導の体験がコミュニケーションといった対人関係スキルを向上させることが明らかとなった。このことから、学校教育における体育授業については、スポーツ指導法といった実習・体験型学習が有効な手段として考えられる。

なお、本研究では非認知スキルとの関与についても検証したが、相川・藤田(2005)によって作成された成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いて得られた、社会的スキルの因子と非認知スキルとの関係として、相関が高い傾向にあると仮定するに留まった。しかし、認知スキルを高めるために一番効率が良くとされている時期は、6-9歳程度とされ(Carneiro et al, 2003)、非認知スキルにおいては、10歳以降の年齢においても獲得可能であることが示されていることから(Cunha et al, 2008)、スポーツ指導による体験学習が、職業人生の成果

をあげることに効果的である教育として期待される可能性を示唆した。

以上のことから、単に競技だけを継続するといった運動部活動ではなく、競技活動と同時に、社会的スキルの向上を獲得できた、スポーツ指導による体験型学習を定期的におこなうことが、今後の大学運動部活動の在り方として、重要であることが明らかにされた。

今後の課題については、スポーツ指導の対象者として、児童としたが、指導の現場では、中学生および高校生も扱わなければならないため、対象者の発達年齢が異なっても、本研究結果のような社会的スキルを獲得することができるのか、また、指導者および対象者による性差の違いについても検討する必要がある。

5. おわりに

大学の陸上競技部に在籍している男子学生7名、女子学生3名の計10名を対象として、実際に指導現場で携わることで、児童へのスポーツ指導の経験が対人関係スキルといった社会的スキルにどのように影響するのか検証することを目的とした。そして、社会的スキルを調査するにあたり、相川・藤田(2005)によって作成された成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いた。主な結果は、以下のとおりである。

- 1) 社会的スキルにおいて「関係開始」、「関係維持」、「解説」、「記号化」の4つの因子によって有意な向上を示し、コミュニケーションといった対人関係スキルに影響を及ぼすことを示唆した。
- 2) 社会的スキルにおいて「感情統制」の1つの因子によって有意な低下を示し、自らの感情をコントロールすることが可能であると示唆した。
- 3) 社会的スキルと非認知スキルとの関与が高まれば、スポーツ指導による体験型学習が、キャリアアップの成果を高めることに効果的

な教育手段として有効であると推察された。

4) 学校教育における体育授業については、スポーツ指導法といった実習・体験学習が有効な手段として示唆された。

以上のことから、本研究の結果により、単に競技だけを継続するといった運動部活動ではなく、競技活動と同時に、社会的スキルの向上を獲得することができるスポーツ指導による体験学習を定期的におこなうことが、今後の大学運動部活動の在り方として、重要であることが明らかにされた。

参 考 文 献

- 阿江美恵子 (2000) 運動部活動の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から。体育学研究, 45 : 89-103.
- 相川 充 (2000) 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学。サイエンス社.
- 青木康太郎・粥川道子・杉岡品子 (2012) キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究。北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 3 : 27-39.
- Carneiro, Pedro and Heckman, James J. (2003) Human Capital Policy. National Bureau of Economic Reserch, NBER Working Paper Series 9495.
- Caprara, G. V., Barbaranelli, C., Pastorelli, C., Bandura, A. and Zimbardo, P. G. (2000) Prosocial foundations of children's academic achievement. Psychological Science, 11: 302-306.
- Cornelißen, Thomas and Christian Pfeifer (2010) The Impact of Participation in Sports on Educational Attainment: New Evidence from Germany. Economics and Education Review, 29(1): 94-103.
- Cunha, Flavio and James J. Heckman (2007) The Technology of Skill Formation. American Economic Review, 97(2) : 31-47.
- 大坊郁夫・横山ひとみ・磯友輝子・谷口淳一 (2010) 社会的スキル・トレーニングにおける対人関係解説。電子情報通信学会技術研究報告, 110 : 85-90.
- Gutman, L. M. and Schoon, I. (2013) The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people. Literature review, Institute of Education, University of London.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007) コミュニケーション・スキルに関する諸要因の階層構造への統合の試み。パーソナリティ研究, 15 : 347-361.
- 橋本公雄 (2012) 体育実技授業における心理社会的要因を媒介としたメンタルヘルス改善—向上効果のモデル構築—。大学体育学, 9 : 57-67.
- Heckman, James J. and Jose Scheinkman (1987) The Importance of Bundling in a Gorman-Lancaster Model of Earnings. Review of Economic Studies, 54(2): 243-255.
- Heckman, James J., Jora Stixrud and Sergio Urzua (2006) The Effects of Cognitive and Noncognitive Abilities On Labor Market Outcomes and Social Behavior. Journal of Labor Economics, 24(3): 411-482.
- Heckman, James J., Moon, S. H., Pinto, R., Savelyev, P. A. and Yavitz, A. Q. (2010) Analyzing Social Experiments as Implemented: A Reexamination of the Evidence from the Highscope Perry Preschool Program. Quant. Econom, 1(1): 1-46.
- Heckman, James J. and Tim Kautz (2013) Fostering and Measuring Skills Interventions that Improve Character and Cognition. NBER Working Paper Series 19656.
- Holt, N., Tamminen, K. A., Tink, L. N. and Black, D. E. (2009) An interpretive analysis of life skills associated with sport participation. Qualitative Research in Sport and Exercise, 1(2): 160-175.
- 石倉忠夫 (2000) 体育実技受講生にいける大学1年生の社会的スキルと孤独感の関係。同志社保健体育, 39 : 61-77.
- 賀川昌明・横田直樹 (2003) 小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連。鳴門教育大学研究紀要, 18 : 9-18.
- 桂 和仁・中込四郎 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因。体育学研究, 35 : 173-185.
- 川辺 光 (1980) 「学校運動部集団の日本人的特性」体育とスポーツ集団の社会学。同和書院, pp. 61-82.
- 菊 幸一 (2009) 学校運動部活動が抱える諸問題と生涯スポーツ。季刊教育法, 162 : 12-19.
- 公益財団法人日本陸上競技連盟 (2010) 陸上競技指導教本アンダー12 楽しいキッズの陸上教室。大修館書店。
- 小杉正太郎 (2002) ストレス心理学—個人差のプロセスとコーピング—. 川島書店, pp. 59-74.
- Lee, Sun Youn and Fumio Ohtake (2014) The Effect of Personality traits and Biological Factors on Schooling, Earnings and Career Promotion” Unpublished manuscript.
- 文部省 (1972) 体育・スポーツの普及振興に関する基本的方策について。保健体育審議会。
- 文部省 (1998) 我が国の文教施策—心と体の健康とスポーツ—. 大蔵省印刷局。
- 中室牧子 (2015) 「学力」の経済学。ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 中澤 史・麓 正樹・谷木龍男・山崎将幸 (2014) スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果。法政大学スポーツ研究センター紀要, 32 : 9-13.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳 敏 (2002)

- 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果. 野外教育研究, 5: 45-54.
- 小川一美 (2000) 初対面場面における2者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47: 173-183.
- 大野貴司・徳山性友 (2015) わが国スポーツ組織の組織的特性に関する一考察—そのガバナンス体制の構築に向けた予備的検討—. 岐阜経済大学論集, 49: 1-21.
- Scaraw, G. and Dennison, R. S. (1994) Assessing metacognitive awareness. *Contemporary Educational Psychology*, 19: 460-475.
- 清水安夫・尼崎光洋・煙山千尋・宮崎光次・武田一・川井 明 (2010) 大学体育における野外教育活動の可能性の検討—プロジェクトアドベンチャー・プログラムを導入したキャンプ活動におけるリーダーシップ及びフォロワーシップの養成—. 大学体育学, 7: 25-39.
- 須田和也 (2011) 大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究. 共栄大学研究論集, 9: 37-53.
- 杉山佳生 (2004) 競技社会的スキル及びスポーツにおける個人・社会志向性と日常場面での向社会的行動との関係. 健康科学, 26: 41-48.
- 杉山佳生 (2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性. 大学体育学, 5: 3-11.
- 鈴木 壮・中込四郎 (1988) スポーツ経験による人格変容に関する研究展望. 岐阜大学教育学部研究報告, 12: 59-72.
- 高井範子 (2007) 青年期および成人期における忍耐力と失敗懸念に関する研究. 太成学院大学紀要, 9: 31-40.
- 竹之下休蔵・岸野雄三 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター.
- 玉瀬耕治・角野文宜 (2005) 対人ストレスとアサーション, セルフ・コントロールの関係. 教育実践総合センター研究紀要, 14: 37-41.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43: 33-42.
- 内海和雄 (1989) スポーツの公共性と主体形成. 不味堂出版, pp. 180-184, 226-229.
- 内海和雄 (1998) 部活動改革—生徒主体への道—. 不味堂出版, pp. 188-208.
- Wookfork, R. L. and Deverk, S. (1979) Perceptions of assertion: An empirical analysis. *Behavior Therapy*, 10: 404-411.